

日本語教育学における思考様式言説の変化と問題点

学会誌『日本語教育』の内容分析から

早稲田大学日本語教育研究センター

牲川波都季

1. はじめに 問題の所在

「言語と思考様式とが相互規定関係を持つ」という言明は、心理言語学で指摘されているように、言語・思考様式それぞれを定義・限定した上でなければ、証明も反証もできない非常に漠然とした言明にすぎない(今井 2000)。しかしながら、日本語教育学では、1975年頃に、言語と思考様式とは相互に規定関係であると述べ、それを根拠に、日本語学習者に日本・日本人の思考様式の習得を求める言説が複数存在した。その代表例である宮地(1975)は、言語と思考様式とに関連があるということを、「正しい事実」であるかのように述べ、その「正しい事実」を提示することによって、日本語学習において、日本人の思考様式の習得が必要かつ当然であるかのように主張する。ここには、曖昧だが反証の難しい根拠をもとに、日本語学習者への日本人の思考様式の刷り込みを正当化するという問題が存在する(牲川 2004a)。

こうした問題のある言説は、説明のための道具立てとして、国家・国民・民族が固定的な思考様式をもつ、思考様式と言語とは何らかの関連性をもつ、という前提を必要とする。こうした道具立てはいつどのように現れたのか、また、宮地と同様の問題は別の時期にも見られたのか。これらを明らかにすべく、本研究では、学術雑誌『日本語教育』30年分を対象に、日本語教育学において日本語教育学研究者が「思考様式」をどのように意味づけてきたのか、その意味づけの変遷を記述する。なお、1962年から80年については、すでに牲川(2004a, b)で分析した。今回の報告では、対象時期をさらに延長し、より長期的・包括的な視点から、意味内容の変化の傾向を捉えたい。

2. 研究方法

2.1. 方法と分析データ

本稿では、Krippendorff(1980=1989)を参照し、言説の意味内容についての内容分析を行う。

具体的な手順は、まず、学術雑誌『日本語教育』の30年分(1号(1962年12月)~75号(1991年11月))の論文から、「考え方」「発想様式」「心性など」、「思考様式」に類する語を含む文とそれを意味づける文脈(以下、「思考様式言説」)を抜粋した。

次に、宮地の【日本人の思考様式が日本語と関連していることを根拠に、日本語学習者に対し、日本人・日本の思考様式の学習・理解を求めること】という言説内容と比較するため、以下の手順でさらに分析対象を絞った。

- 1) 思考様式が、国家・国民・民族単位で、固定的に捉えられている文脈
- 2) 思考様式が、言語と何らかの形で関連づけられている文脈
- 3) 上の2条件のいずれかに当てはまるもののうち、論文筆者自身が意味づけを行っている文脈。(ただし、一論文内であっても、明らかに意味づけの異なる文脈だと判断された場合、別の文脈

とした。)

この操作の結果、記述単位として合計 90 件を得た(表 1 参照)。

表 1 「思考様式言説」一覧

刊行年	掲載号	通し番号	著者名	カテゴリー	刊行年	掲載号	通し番号	著者名	カテゴリー
1963.10	3	(1)	池尾スミ	B	1980.07	41	(46)/(47)	関正昭	B/F
1964.12	4.5	(2)	奥水実	B	1980.07	41	(48)	顧海根・徐昌華	B
1967.12	10	(3)	四倉早葉	A	1981.02	43	(49)	能登博義	A
1968.04	11	(4)	川瀬生郎	B	1981.06	44	(50)	顧海根	C
1968.10	12	(5)/6)	阪倉篤義	A/B	1981.10	45	(51)	上野田鶴子	B
1968.10	12	(7)	寺村秀夫	C	1982.03	46	(52)	北條淳子	A
1969.10	14	(8)	水谷信子	C	1982.03	46	(53)	三嶋健男	B
1970.12	15	(9)	池尾スミ	B	1982.03	46	(54)	富田隆行	D
1970.12	15	(10)	榊原政弥	C	1982.03	46	(55)	中村妙子	E
1973.05	19	(11)	宮地宏	C	1982.06	47	(56)	宮地裕	B
1973.08	20	(12)	西尾寅弥	B	1983.02	49	(57)	牧野成一	A
1973.08	20	(13)	森田良行	D	1983.02	49	(58)	顧海根	C
1973.09	21	(14)	山下秀雄	C	1984.02	52	(59)	小矢野哲夫	C
1973.09	21	(15)	北條淳子	E	1984.06	53	(60)	龍田俊夫	A
1973.12	22	(16)	小川芳男	C	1984.06	53	(61)	村野良子	C
1973.12	22	(17)	倉又浩一	C	1984.10	54	(62)	吉岡一彦	B
1974.03	23	(18)	湊吉正	B	1985.10	57	(63)	ピロツタ、丸山淳	A
1974.08	24	(19)/20)	Meiko S. Han	A/B	1986.02	58	(64)	横田淳子	C
1974.08	24	(21)	ヘンリー、 美・早瀬	B	1986.07	59	(65)	佐久間まゆみ	B
1974.08	24	(22)	小田切隆	B	1986.07	59	(66)/(67)	山下秀雄	B/F
1974.08	24	(23)	渡嘉敷文子	B	1986.11	60	(68)	中山光男	A
1974.08	24	(24)	野元菊雄	C	1986.11	60	(69)	稲葉継雄	A
1974.12	25	(25)	椎名和男	A	1987.06	62	(70)	水野義道	B
1975.03	26	(26)	三島登志子	D	1987.06	62	(71)	町田敬子・村上 治子	F
1975.08	27	(27)	斎藤修一	E	1988.06	65	(72)/(73)	ブリーダー・インカ プロム	A/F
1975.08	27	(28)	今田滋子・中 村妙子	B	1988.06	65	(74)	奥田久子	B
1975.08	27	(29)	川本茂雄	C	1988.06	65	(75)	豊田豊子	B
1975.08	27	(30)	宮地宏	D	1988.06	65	(76)	金本節子	F
1975.12	28	(31)	飯豊毅一	C	1988.11	66	(77)	山田泉	A
1976.04	29	(32)	吉田弥寿夫	C	1989.03	67	(78)	J・V・ネウスト ブニー	D
1976.04	29	(33)	大西晴彦	E	1989.07	68	(79)	奥村訓代	A
1977.07	33	(34)	宮地裕	C	1989.07	68	(80)	中田智子	B
1978.02	34	(35)	斎藤織枝	B	1989.11	69	(81)	水谷信子	B
1978.02	34	(36)	茅野直子・仁 科喜久子	E	1989.11	69	(82)	中道真木男ら	C
1978.09	35	(37)	北條淳子	E	1989.11	69	(83)	辻村敏樹	D
1979.03	37	(38)	加藤和男	C	1990.07	71	(84)	上山民栄	F
1979.03	37	(39)	高見沢孟	D	1990.11	72	(85)/86)	堀江・インカピロ ム・ブリーダー	A/B
1979.07	38	(40)/(41)	池尾スミ	B/F	1990.11	72	(87)	楊凱榮	B
1979.07	38	(42)	有馬俊子・石 沢弘子	D	1991.03	73	(88)	加藤英司	B
1979.10	39	(43)	森清	A	1991.03	73	(89)	山下暁美	B
1979.10	39	(44)	佐久間勝彦	B	1991.07	74	(90)	許卿姫	B
1979.10	39	(45)	松本千恵子	F					

2.2. 分類基準

意味内容の差異、変化を解明するために、記述単位 90 件を以下のように分類した。

- 1) 言語と思考様式とが何らかの形で関連づけられているか否か。

2) 1)で関連づけありと判断された記述について、関連づけの内容が説明されているか否か。説明の有無については、影響関係、時間的な前後関係、発生・被発生関係、完全に一致した関係など、図示しうる程度の説明がなされている場合、説明有とした。

3) 日本語学習者に対し、日本・日本人の思考様式の習得・知的理解を求めているか否か(本報告では、この求めを、「同化傾向」と呼ぶ)。

以上の分類基準を組み合わせると、AからFの6カテゴリーが得られる(表2)。

それぞれのカテゴリーが示す意味は以下の通りである。

- A 言語とは無関係に、国民・民族・国家単位の思考様式の内容を示す意味内容
- B 言語と思考様式とを説明なしで関連づけている意味内容
- C 言語と思考様式とを説明つきで関連づけている意味内容
- D 言語と思考様式とを説明つきで関連づけ、かつ、「同化傾向」のある意味内容
- E 言語と思考様式とを説明なしで関連づけ、かつ、「同化傾向」のある意味内容
- F 言語とは無関係に、「同化傾向」のある意味内容

表2 「思考様式言説」の特徴を示すカテゴリー

	関連付けの有無	説明の有無	同化傾向の有無
A	×	—	×
B	○	×	×
C	○	○	×
D	○	○	○
E	○	×	○
F	×	—	○

表3 「思考様式言説」の変遷

年	A	B	C	D	E	F
1962						
1963		(1)				
1964		(2)				
1965						
1966						
1967	(3)					
1968	(5)	(4)(6)	(7)			
1969		(8)				
1970		(9)	(10)			
1971						
1972						
1973		(12)	(11)(14)(16)(17)	(13)	(15)	
1974	(19)(25)	(18)(20)(21)(22)(23)	(24)			
1975		(28)	(29)(31)	(26)(30)	(27)	
1976		(32)				(33)
1977			(34)			
1978		(35)			(36)(37)	
1979	(43)	(40)(44)	(38)	(39)(42)		(41)(45)
1980		(46)(48)				(47)
1981	(49)	(51)	(50)			
1982	(52)	(53)(56)		(54)	(55)	
1983	(57)		(58)(59)			
1984	(60)	(62)	(61)			
1985	(63)					
1986	(68)(69)	(65)(66)	(64)			(67)
1987		(70)				(71)
1988	(72)(77)	(74)(75)				(73)(76)
1989	(79)	(80)(81)	(82)	(78)(83)		
1990	(85)	(86)(87)				(84)
1991		(88)(89)(90)				

3. 分析結果と考察

カテゴリーで分析した結果を、年ごとにまとめると(表3),以下の結果を読み取ることができる。

1) 言語と思考様式とを関連づける意味づけ(B・C・D・E)は、1973年に急増する。また、それらの意味づけは、特に1973年から75年にかけて集中して現れる。

2) 説明なしで関連づける意味づけ(B・E)は、1968年以降、ほぼ継続して表れる。

3) 説明つきで関連づける意味づけ(C・D)は、1973年から75年に特に集中しているが、それ以降も散発的に出現する。

4) 言語と思考様式を関連づけ、かつ「同化傾向」のある意味づけ(D・E)は、1973年から82年に集中して現れる。

5) 言語と思考様式とを関連づけずに、「同化傾向」のある意味づけ(F)は、1976年から80年に集中し、また、86年以降にも現れる。

4. 結論と今後の課題

この分析結果を総合すると、1968年以降、言語と思考様式とを関連づけようとする自体は、分析対象時期に継続していること、ただし、両者の関連を説明しようとしたのは、特に1973年から83年頃に限られていること、両者を関連づけた上で、日本・日本人の思考様式の理解・学習・習得を求める傾向も、ほぼ同時期に限られること、86年頃以降は、両者を関連づけないが、日本・日本人の思考様式への「同化」を求める傾向は存在したことがわかった。今後は、それぞれの記述内容の質的分析と、1992年以降から現在までの意味内容分析とを行った上で、意味内容の変化がおこった原因を、日本語教育学を取り巻く社会的・政治的状況などを踏まえ解明していきたい。

引用文献

今井むつみ(2000)「サピア・ワーフ仮説再考 思考形成における言語の役割、その相対性と普遍性」『心理学研究』71(5)

牲川波都季(2004a)「日本語教育における言語と思考 その意味づけの変遷と問題点」

牲川波都季(2004b)「日本語教育学における「思考様式言説」の変遷」『日本語教育』121

宮地宏(1975)「目には青葉・・・」『日本語教育』27

Krippendorff, Klaus (1980) Content analysis: An Introduction to Its Methodology. Sage Publications. (=1989, 三上俊治・椎野信雄ら訳『メッセージ分析の技法 「内容分析」への招待』勁草書房)